レスリングにおける脳振盪の受傷機転の解明

Investigation about the mechanism of concussion in wrestling

1K10C279-5 戸叶 達也

主査 福林 徹 先生

副査 鳥居 俊 先生

【目的】

スポーツ現場において脳振盪を受傷した選手はSCAT3(Sport Concussion Assessment Tool 3)等の評価ツールによって評価され、競技復帰に関して管理されるべきである。しかしながら、自身が経験した大学体育会レスリング部では誤った認識により適切な休養や医療機関の受診をせずに競技に復帰したケースがみられた。レスリングでは頭部・頸部に損傷を与える可能性の高いチョークやパイルドライバー、ヘッドロックなどが反則とされている。しかし、がぶり返しやバックドロップを受けた際や、タックルに入った際、ブリッジを潰された際などに頭部・頸部の外傷を受傷することが多く、しばしば重度な外傷を引き起こす。それらの外傷の中でも、脳振盪は受傷時に重篤な合併症を引き起こす可能性がある。

そこで本研究の目的はレスリング中に起こる脳振盪の受傷機転を明らかにし、予防対策について検討することとした。

【方法】

大学体育会レスリング部に所属する58名(3大学)を本研究の調査の対象とし、レスリング中の脳振盪について、アンケート調査を実施した。年齢は 19.9 ± 1.4 歳(4年生15名、3年生13名、2年生16名、1年生14名)でレスリング歴は 9.4 ± 4.6 年であった。調査項目は氏名、記入日、生年月日、学年、階級、レスリング歴、過去の最高競技成績、構えの向き、他の競技歴、過去のレスリング中の脳振盪(“脳振盪”と診断されていないものも含む)の経験の有無について、脳振盪の経験回数、経験した時の年齢、休んだ期間、きっかけになった技・原因、症状(選択式)とした。アンケート用紙は巻末に添付した。

さらに所属階級が60kg以下の者25名(48kg級は1名、51kg級は4名、55kg級は10名、60kg級は9名)を軽量級、所属階級が61kg以上74kg以下の者22名(63kg級は1名、66kg級は11名、72kg級は1名、74kg級は9名)を中量級、所属階級が84kg以上の者は11名(84kg級は6名、96kg級は3名、120kg級は2名)を重量級とし、比較した。

【結果】

脳振盪が発生した技(総数107件)では、両足タックル

は35件、片足タックルは13件、組手は9件、首投げは8件(7.5%)、ジャーマンスープレックスは6件、そり投げは4件、バックドロップは2件、パワーボムは2件、サイドリフトは2件、その他は26件であった。脳振盪が発生した技の中で、技を受けたケースは51件、技をかけたケースは21件、どちらが技を仕掛けたか不明であるケースは35件であった。軽量級における脳振盪が発生した技(総数46件)では、両足タックルは10件、片足タックルは9件、組手は2件、首投げは2件、ジャーマンスープレックスは4件、そり投げは1件、パワーボムは2件、サイドリフトは1件、その他は15件であった。中量級における脳振盪が発生した技(総数48件)では、両足タックルは27件、片足タックルは4件、組み手5件、首投げは3件、ジャーマンスープレックスは1件、そり投げは2件、その他は6件であった。重量級における脳振盪が発生した技(総数13件)では、組手は2件、首投げは1件、ジャーマンスープレックスは1件、そり投げは1件、バックドロップは2件、サイドリフトは1件、その他は5件であった。

【考察】

今回の調査の結果、レスリングにおける脳振盪の受傷機転として、タックルや組み手、投げ技等の要因が明らかとなった。頭部外傷・脳振盪の軽減や防止のために、レスリング競技者にも頸部の安定性を確保する必要がある。レスリング競技者は、自身のコンディションを把握し、ブリッジやストレッチを行うことで頸部の安定性を確保したうえで練習に臨むべきである。

また、脳振盪を受傷してから、選手が練習・試合に復帰するまで段階的な手順を踏むことが重要である。レスリング関係者は脳振盪に対する理解が浅く、SCAT3という言葉さえ聞いたことのない指導者、選手が大半である。また、トレーナーやドクターが帯同するチームは限られており、体育会やレスリング競技団体においても医科学サポートを受けられるのは一部の選手のみである。そのため、脳振盪の評価方法や正しい認識が競技者に浸透するまでには時間がかかる。日本レスリング協会を中心にレスリングにおける脳振盪の実態をより明白にし、選手が脳振盪を受傷してから、競技復帰までのガイドラインを作成する等の予防対策を講じる必要があると考えられる。